

夏見知章氏著

『芭蕉と紙子—佗と風狂の系譜—』

米谷 巖

国文学における紙子史を一貫して追究して来られた夏見知章氏が、このほど永年の研究をまとめられ、刊行されたことを、まずお祝い申しあげたい。

本書は昭和二十九年以降、これまで誌上や学会で発表された論稿を、全面的に改稿ないし補筆し、また新たに書き下した一篇（第四章）を加えて、一書としたものである。

「あとがき」に氏が説明しておられるように、第一章をいわば概説とし、第二章以下の三篇を各論とする構成になっている。

第一章 紙子史と芭蕉—には、第一節 紙子史における芭蕉の位置について—「わび」の系譜—、第二節 紙子史における「狂」の系譜—芭蕉の風狂と紙子—の二論がある。第一節では、その簡素さのゆえに、はじめ物質的執着を放下した出家の草庵生活の中で愛用された紙子が、芭蕉および蕉門の徒によつて、その貧寒さを積極的、肯定的に認められるに至る経緯を明らかにし、もと宗教的解脱としての「佗び」の資縁となつた紙子が、芭蕉において美的境地としての「わび」をになうものとなつたと説く。第二節は芭蕉に至る紙子史を、「風狂」の發展という観点からたどっている。共にまことにユニークな芭蕉論となつていて、大いに啓発された。ただ、い

わば人生態度としての「風狂」と、美的理念としての「わび」が、どのようにかかわるのかについて、いま少し言葉がほしいように思う。

第二章 紙子—は、次の四篇から成る。

第一節 紙子の名称—紙衣から紙子へ—

第二節 紙子の原紙と産地—奥州白石紙子—

第三節 紙子の製法—紀州華井紙子—

第四節 紙子の加工販売—駿州安部川紙子—

この章は、工芸技術史または産業経済史の分野に踏み込んだ探求といえようが、これも氏の主題に対する周倒な用意のほどを示すものにほかならない。

第三章 紙子史—は、本書の二分の一の紙数を費した力篇で、紙子の精神史のすぐれた記述となっている。

第一節 出家と紙子—紙子史一、出家着用時代—

第二節 紙子の道服—紙子史二、武家着用時代—

第三節 紙子貧寒の姿—紙子史三、庶民着用時代—

第四節 紙子の生活美的形成—紙子史四、風流人着用時代—

第四（最終）章 芭蕉の紙子—は、芭蕉を中心に、紙子に関する

句文をとりあげている。「あとがき」によれば、氏はこの章に最も重点を置いて執筆されたが、紙幅の制約で約三分の一に縮めたものだという。紙子に関する氏の豊富な知識を駆使しての句解には、教えられるところが多い。

第一節にたとえば、笈の小文の旅中、名古屋の俳席で挨拶した芭蕉の発句「ためつけて雪見にまかる紙子かな」の紙子を、仙台産の白石紙子であったと推定され、小紋の染紙子である可能性も充分考えられるとある。紙子といえば、柿渋を塗っただけの無地の染紙子を想像するのが一般であるが、巻末に貼付してある種々の模様の染紙子のサンプルを見ると、質素ななかにもこまやかな一種洗練された美しさに心魅かれる。しかし、芭蕉がその時着ていた紙子のイメージを修正しうるとすれば、それによって、「ためつけて」の句の意味ないし味わいがどう変わるのか、言及されていないのは惜しまれる。

第二節では、初期および蕉風の連句に見える紙子の句を、「去来抄」に説く付合手法三変説―物付・心付・句付によって検証し、蕉風においては、句付にふさわしく、わびの風雅境としての紙子の深い気分を詠むことが多かったと指摘している。明快で、示唆に富む論述である。もつとも、去来の三変説を貞門・談林・蕉風の俳風に一律に適用することには、つとに批判がある。殊に貞門の句は言葉の洒落で、談林の句は意味で付けているとする図式は、挙げられた例句の限りでは首肯できるが、なお慎重を要するかと思う。

さらに、第三節では紀行と俳文に見える紙子を、第四節には書簡および俳論のなかの紙子をとりあげてあって、それぞれに興深く読んだ。ただし、このようにジャンル別に紙子資料を挙げて、満遍に

論述する仕方は、芭蕉における紙子の人生的意義あるいは蕉風における美的意味を探るのには、やや立体的性を欠くうらみなしとしない。右に見てきたように、本書は単に製紙史や服飾史の立場から書かれたものではもとよりない。物としての紙子ではなく、いわば精神美としての紙子を、芭蕉を焦点に据えて論究された、きわめて独自性の高い労作である。

このようなむづかしいテーマに取り組まれた氏の地道なご努力に深く敬意を表するとともに、一知半解の妄言を連ねた非礼をお詫び申しあげる。(昭和四十七年四月、清風出版社刊。A5版二六三頁二八〇〇円)

― 広島大学助教授 ―